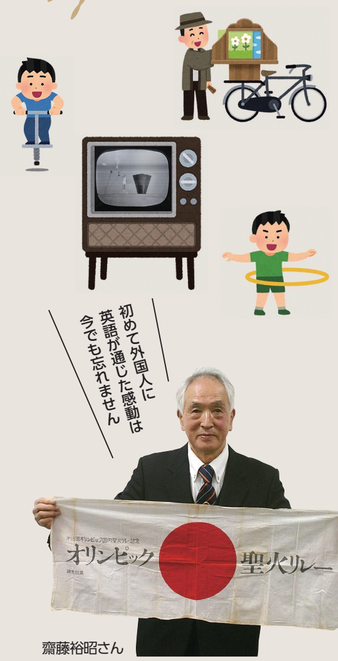
1964東京オリンピック　オリンピアの火を運んだ戸塚の少年たちがいた…

1963(昭和38)年8月21日、ギリシャのオリンピアで点火された聖火。
たくさんの人に見守られながら東京まで運ばれました。
戸塚で作られた聖火トーチ®(本紙5ページ参照)で聖火を国立競技場の聖火台へと届けるため、
聖火リレーに伴奏するエスコートランナーとして駆け抜けた少年たちがいました。

当時、戸塚高校陸上部として「エスコートランナー」に選出された経験を持つ齋藤裕昭さん、石井哲夫さんのお二人と戸塚高校副校長(現在は市立南中学校長)の藤宮学さんにお話を伺いました



齋藤裕昭さん

初めて外国人に英語が通じた感動は今でも忘れません

▲聖火の受渡し（金沢区役所前）　神奈川県立公文書館所蔵

石井哲夫さん

無我夢中の2キロでしたが、すごい体験をしたと思っています

藤宮学さん（取材時：戸塚高校副校長、現在は市立南中学校長）

オリンピックの素晴らしさを今の子どもたちに伝えていきたいですね

当時のオリンピックは盛り上がりに欠けていた?!
～ランナーの選出まで～

齋藤：当時の戸塚高校陸上部は結構強くて、特に男子は部員数が少なくても団結力がありました。当時の陸上部の顧問の先生が「少しでもオリンピックの雰囲気を味わえるよう」と企画してくれたのだと思います。戸塚高校からは陸上部５人と応援団長１人が選出されました。

委嘱状
石井哲夫 殿
オリンピック東京大会
国内聖火リレー神奈川
県内走者に委嘱する
昭和39年8月1日
会長 内山太郎

委嘱状／オリンピック東京大会国内聖火リレー神奈川県実行委員会発行(写真左)、走者のユニフォーム(写真右)

Q：お二人はランナーに選ばれた時はどう思いましたか？

齋藤：実はそんなに実感はありませんでした。当時の日本国内は最初の頃はそんなにオリンピックが騒がしくなかったんですよ。テレビなどの普及率も低かったせいもあるのでしょうね。名称は聞いたことがあっても、肌でオリンピックを実感するまではいってなかった人が多かったと思います。

石井：確かに、始まる前は周辺の人はあまりオリンピックには興味がなかったと思います。実際、僕も選ばれたことに驚きはなかったですね。私の家庭内でもオリンピック関係の話はしていなかったです。でも、誰も体験できないことを体験できるんだから栄誉だなっていうことは感じました。緊張もしましたよ。

藤宮：そうなんですね。当時の写真を見る限りでは、もっと盛り上がっていたんだと思っていました。今のようにテレビやインターネットが発達していなかったから、競技経験者とか関係者のみが関心を持っていたくらいだったのでしょうね。でも、戸塚高校で開催年に行われた体育祭の名称に「オリンピック東京大会記念」という冠がついていたのを見ると、学校として生徒たちにオリンピックを印象付けようとしていたことがわかりますね。選考会なども行われたのですか。

1964年の市立戸塚高校の体育祭の模様　写真提供：内海　宏

石井：エスコートランナーの選考会は三ツ沢競技場で行われました。1キロを4分以内で走れることが条件で、陸上部としては簡単にクリアできるレベルでしたが、さらに10月10日時点で満16歳の人が対象で、自分は９月生まれでぎりぎりセーフでした（笑）。

市内走者437人募集（横浜市オリンピック事務局）
条件:①3000mを15分で完走できる
②市内在住の16歳～20歳の心身ともに健全な人

練習場所はでこぼこ地面の競馬場跡地！
～ランナー選出後～

齋藤：出場が決まってから練習が始まったのですが、主な練習場所は旧戸塚競馬場跡でした。地面がでこぼこしていて、雨が降った後なんかは一番先頭を走らないと、頭から泥かぶって大変。「なんでこんな所を走らせるんだ」と思っていたけど、今思えばあえてそういう悪路を走ることで鍛えられていたのかなと思います。

藤宮：興味深いですね。今の子どもたちは整地されたところしか走っていないので、あえて不整地を探して練習することもありますよね。当時の戸塚高校は学校のグラウンドのすぐそばに「戸塚競馬場跡地」があって、まさに走れる不整地。そんな環境があって恵まれていたとも言えますね。また、戸塚高校は学校が山の上にあって、今でこそ戸塚駅から地下鉄がありますが、当時は戸塚駅から徒歩で毎日山登りをしていたようなものだから必然的に鍛えられていたかもしれないですね。

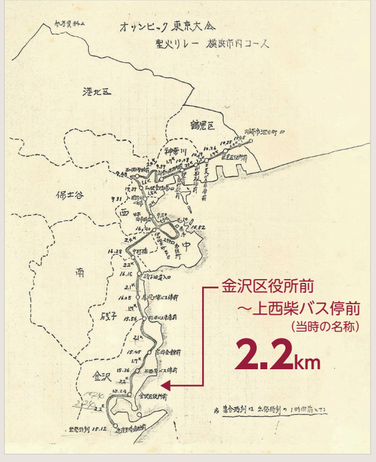
1933(昭和8)年、吉田町(現在の東戸塚小学校辺り)に作られた競馬場は1942(昭和17)年に汲沢町(現在の戸塚高校辺り)に移転してからも、大変賑わっていました。
(1950(昭和25)年に閉鎖)

隊列を崩さないように慎重に…
～いよいよ本番～

Q：当時の写真を見ると、沿道にたくさんの市民が旗を振って応援しています。その真ん中を走ったときはどんな気持ちでしたか？

齋藤：沿道の人の声や拍手は耳に入ってきませんでした。エスコートランナーとして隊列を崩してはいけない、横列、縦列を乱してはいけないと無我夢中でした。正規の聖火ランナーはトーチの持ち方や走り方など指導されていましたが、自分たちはエスコートランナーなので、とにかく列を乱さないように、見よう見まねで縦2列になって走りましたよ。

石井：そうでしたね。とにかく列を揃えるのに必死だったので、2キロがあっという間に感じました。



オリンピックを一過性のものにしないために…
～ランナーを経験して得たこと～

石井：ランナーに選ばれた時はあまりピンとくるものがなかったのですが、たまたま見に行った映画館で「神奈川新聞ニュース」の聖火ランナー試走のニュースで、自分の走っている姿が放映されたときは、改めてすごいことをやっているんだという気持ちになりました。

▲石井さん自作のノート

ランナーは時速12キロで進みます。聖火ランナー1人に副走者2人と20人以内のエスコートランナーが走りました。
―「オリンピック東京大会　国内聖火リレー神奈川県内リレー実施要綱」より

自分は出場が決まってからオリンピックのことをもっと知りたくなり、いろいろな競技のことを調べて知ることで、オリンピックをよりリアルに感じることができました。

齋藤：そうですね、実際、僕が小学校の時は、オリンピックに関する授業を受けたことないんですよ。ある日から突如テレビ番組でオリンピック特集が組まれ、外国人に伝わる英会話として「Speak more slowly (もっとゆっくり)」、「write it down (書いて)」という言葉が連日のように放送されていました。試しに本番当日ニュージーランドの選手に「write it down」と話しかけてみたら、パンフレットの裏面に住所を書いてくれました。通じたんです！話しかけるのも勇気が必要でしたが、「英語が通じた」「初めて外国の人と意思疎通ができた」ことは、この上ない経験になりました。

Q：当時のお二人に大きな影響を与えたオリンピックはすごいですね

齋藤：世界中の人が集い、仲間の大切さから世界平和の大切さまで教えてくれるオリンピックの素晴らしさを今のこどもたちに伝えたいですね。こどもたちにも「オリンピック」の意義を知ってほしいです。そしてスポーツの素晴らしさとは何かを考えてほしいです。ただ「勝った」「負けた」「メダルの数」だけではなく、オリンピックの歴史や定義、その大会が開かれるまでに関わった人の苦労など、大会開催に至った経緯にもスポットライトを当てるべきだと思います。

～オリンピック学習会～
齋藤氏は、スポーツの素晴らしさや国際平和の大切さをこどもたちに知って欲しいという思いから、自身が小学校の校長時代に小学生向けの「オリンピック学習会」を2004(平成16)年アテネリンピック前と2008(平成20)年北京オリンピック前に開催。頭に月桂樹の葉っぱを乗せて聖火リレーのトーチを持って写真を撮ったり、オリンピックに関係するクイズなど、身近にオリンピックを感じてもらうことでオリンピックに対する関心が高まり、運動に対して積極的に取り組む動機付けにもなったそうです。

聖火リレー　ア・ラ・カルト

聖火リレーを行う意義
古代オリンピックでは聖火リレーは行われませんでしたが、1936(昭和11)年ベルリン大会のときに古代と近代を結ぶという意味で、ギリシャのオリンピアから主競技場までをリレーしたことが始まりです。東京大会の聖火リレーは6回目にあたります。

コースの紹介
東京を目指す聖火リレーは国内4コースあり、県内を通過する2コースのうち県を縦断する「第2コース」を走りました。

当日の服装
・走者の服装は白ランニングシャツ(女子半袖シャツ)、白パンツ、白靴下、白運動靴を着用するものとする。シャツ、パンツは神奈川県実行委員会が交付する。
・走者は、全員足をそろえて走る。
「オリンピック東京大会　国内聖火リレー神奈川県内リレー実施要綱」から抜粋

神奈川県でのもう一つの聖火リレー
開会式の直後、国立競技場からオリンピック競技が開催される他県に聖火を分ける「分火式」が行われ、ヨット競技が実施される江の島へも聖火が運ばれました。